

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 草本 晶 会員数 約 450 人)

T E L 03-5950-1147

1 前文

現行の学習指導要領に基づく共通テストも2年目を迎え、指導要領の趣旨を踏まえながら、外国語におけるコミュニケーション能力を多角的に評価することを目指して作成された。本評価書では、令和8年度共通テスト（本試験）の『ドイツ語』の問題が、高等学校におけるドイツ語学習の到達目標に照らして妥当な内容となっているか、大学教育を受けるための能力を適切に判定できる内容であるかを総合的に評価、報告する。

令和8年度共通テスト（本試験）におけるドイツ語受験者は104人であり、前年度（96人）から微増し、近年の傾向であった100人前後の水準を維持している。ドイツ語学習者の多くが大学から学習を開始する中、高等学校の3年間という限られた期間で学んだ受験者の到達度を図る試験として、本試験が果たす役割は大きい。

平均点は109.87点であった。最高点は197点、最低点は36点であった。令和7年度の平均点は127.24点であり、前年に比べて約17点の大幅な下落となった。平均点の低下は、後述するように読解量および情報精査の負荷が増加していることなどが影響していると推測される。標準偏差は43.25である。これは得点分布の山が66.62点～153.75点の間に集まっていることを示しており、昨年度よりも受験者にとって難度の高い試験であったことがうかがえる。

問題形式については、前年度（令和7年度）に導入された新形式が概ね踏襲された。読解力を重視し、複数のテキストや資料を組み合わせる形で情報を整理・判断させる形式が定着しつつあると言える。特に、身近な話題に加えて社会・文化的内容を扱う長文が配置されている点が特徴的である。これらの構成は、現行の学習指導要領が掲げる「言語活動を通して情報を的確に理解し活用する力」を測るという観点にも合致していると考えられる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

本年度の試験は、大問6問、設問数29、解答数48から構成され、文法・語彙に関する基礎的事項を問う設問と、まとまりのあるテキストを用いて内容理解、情報整理、判断力を問う設問とがバランスよく配置されていた。全体としては、従来の共通テスト『ドイツ語』の枠組みを踏襲しつつ、読解に基づく複合的な語学力を重視する構成となっている。長文問題に対する配点（大問3～6、149点）は昨年度と同様である。

出題形式に関しては、基礎的な文法知識を問う問題として大問1と大問2が割り当てられ、昨年度と同様の出題形式を取っている。長文問題のテーマは、昨年同様人文科学的・学術的なテーマを扱ったテキストが多く、内容はやや難度が高いものの、時事問題や教養を扱う構成は、大学教育への橋渡しとして適切であるといえる。テキストの種類としては記事、会話、ブログなどが出題され、スライド資料、統計資料なども併せて使用された。これは学習指導要領の目標を見据え、時代の流れにそくした工夫がなされた結果と思料される。

ドイツ語総語数（のべ語数）は2,576語（固有名詞を入れると2,830語）であり、昨年度の2,364語から210語増加した。これに対し、総語彙数（単一語の初出回数）は678語で、昨年度（730語）

より 52 語減少している。このことから、限られた語彙の範囲内で、より多くのテキストを素早く、かつ正確に読み解く力が求められる傾向が強まっていることがわかる。一方で、読解量の増加は、試験時間内での処理を相対的に困難にし、それが平均点の低下につながった可能性がある。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的独和辞典（見出し語 6～8 万語程度）で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は 11 語であった（★）。

★ Angewandte, einplanen, Gewinnung, herunterfallen, Klärung, Klienten, kunstvoll, medial, motivieren, richtigstellen, Ziegturm

総語彙数が増加しているにもかかわらず、むしろ難語は 11 語程度に抑えられている。全体的には基本的語彙あるいはそれらを組み合わせた合成語や派生語であり、それぞれの形態素の意味からある程度の意味を推測することができる語彙が多い。また、難度が高い語にはあらかじめ注やイラストを施すことで結果的に受験者の負担に配慮した工夫が見られ、難度が不必要に高くないよう配慮した出題であったと評価できる。これらはいずれも出現回数が限られており、解答に際して決定的な障壁となる語はなかったと考えられる。

以下、大問ごとの評価を記す。

第 1 問 設問数（2）、解答数（11）、頁数（2）、配点（33）。昨年度、大きく出題傾向が変わり、今年度もその方針が維持されている。テーマは Landshut という街の紹介で、この中に空欄 ①～⑦、および下線を引いた単語（ア）～（エ）が埋め込まれており、いずれも基本的な表現と文法の知識を問うている。受験者に馴染みのあるテーマを採用したことで、全体として昨年度よりも解きやすくなったという印象を受ける。現行の学習指導要領に即した出題形式を採用することで、実用的なドイツ語を問うことを可能にし、受験者のドイツ語能力を適切に測るという目的を達成しているという意味においても、好意的に評価できる。

問 1 9つの語群から、テキスト中の空欄 ①～⑦ にあてはまる語を選ぶ。語群には、前置詞、人称代名詞、形容詞など、様々な語が含まれている。

空欄 ① は、es lohnt と結びつく ② sich を選ぶ。知っていれば簡単に解くことができるが、受験者が学ぶ基本的な表現と言えるのかやや疑問が残る。

空欄 ② は、街の人口を表す基本的な表現である。

空欄 ③ は、直前の zwischen dem 13. und 16. Jahrhundert から過去の事柄に言及していると分かれば、語群の中で唯一過去を表す ④ war を選ぶことができる。

空欄 ④ は、sein+zu 不定詞の理解が問われており、やや難度が高い。

空欄 ⑤ は、直前の 130m から高さを表す ⑥ hohe を選ぶのは容易であろう。続く空欄 ⑥ も、仮に Ziegturm の意味が分からなくても、直後の der Welt に気づくことができれば、最上級の ⑦ höchste を選ぶのは難しくない。

空欄 ⑦ は、erinnert に続く前置詞 ⑧ an を選ぶ。日常的に使われる基本的な表現である。

問 2 テキスト中の下線を引いた単語（ア）～（エ）の語尾として適切なものを選ぶ。否定冠詞、前置詞の格支配、所有冠詞、関係代名詞と、どれも知っておいてほしい知識であり、出題の狙いも明確である。

空欄 ⑧ は、sein 補語の格を問う平易な問いである。直後の Stadt が女性名詞であることに着目し、否定冠詞 kein の語尾として ① -e を選ぶ。

空欄 ⑨ は、直前の前置詞 für が 4 格支配であること、直後の Fest が中性名詞であることに着目し、定冠詞の語尾として ② -as を選ぶ。

空欄 10 は, bieten の間接目的語であることに着目し, 所有冠詞 sein の語尾として複数 3 格の ⑤-en を選ぶ。Besuchern が複数 3 格の n を伴っていることに気がつけば, より一層容易である。

空欄 11 は, 関係代名詞の語尾として ④-em を選ぶ。男性名詞の Ort にかかる関係文であること, an が場所を表す 3 格を取ることに気づくかどうか問われており, やや難度の高い問題である。

第 2 問 設問数 (3), 解答数 (6), 頁数 (2), 配点 (18) であり, 出題形式は昨年度と同様である。6 つの選択肢の中から 5 つを選択して空所を補い, 提示された日本語に対応するドイツ語文を完成させる内容である。全体として, 出題されている語彙の難度は高くない。また, 各設問を解くことにより学習者の文法知識の差異を測るという意図は妥当であると評価できる。一方で, その他の大問と比較すると, 各設問で扱われている状況場面に一貫性が見られず, 傾向を異としている。

問 1 Kannst の後には主語が置かれ, 定動詞が文末に位置するという語順を理解しているかが問われている。また, 提示された文構造から, この文では zu 不定詞を用いないことに気づく必要がある。

問 2 未来形の助動詞 werden を含む wie lange によって導かれる間接疑問文と, 従属接続詞 bis によって導かれる従属節の双方において, 動詞が文末に置かれるという語順の理解が求められている。また, 文脈に即して受動文 überwunden ist を適切に選択できるかも問われており, 複数の文法事項を同時に処理する必要がある。ここで使用されている文法事項および表現の難度は高いといえる。

問 3 理由を表す接続詞 da を用いた従属節構造に加えて, 再帰動詞と前置詞の格支配の知識が求められている。他の設問と同様に, 短い文の中で複数の文法事項ならびに表現の理解を問う点は評価できるが, sich irren in der Person は硬い表現なのではないだろうか。

第 3 問 連続性のある会話の解釈を問う形式である。頁数 (7), 設問数 (7), 解答数 (8) 及び, 配点 (40) である。また, 会話文とブログ, 予定表が使用されている。題材は, ドイツ人女性が, ワーキングホリデーで日本に滞在している恋人を訪ねる際に, 女性の同僚と共に日本旅行を計画するというものである。高校生にも想像しやすいテーマが取り上げられている。

問 1 Lust を使った選択肢で文脈を理解できれば正答が導き出せる。選択肢 ①と ③は使用語彙が同じなので, 選択肢を工夫することが望ましい。

問 2 本文の Unsinn という単語が, 相手の発言を否定していることが理解できれば, 正答が導き出せる。

問 3 旅ブログの画像や説明だけではなく, 会話文を丁寧に読む必要がある。選択肢のキーワードを手がかりに内容を把握すれば, 正答を見極めることができる。

問 4 本文の下線部と同じ意味の文を選択肢から選ぶ問いである。前後の文脈から Bärensafari を取りやめることが分かれば, 選択肢に迷うことはない。本文下線部の後に「ため息をつく」seufzen があることも理解の助けになるかもしれない。

問 5 当初予定していた旅程がどのように変化したか, 会話文を丁寧に追っていけば正答を導くことができる。

問 6 変更後の旅程についての問いである。宿泊地にポイントが絞られているため, その点に注意して会話文を見直せば回答できる。

問 7 会話全体の内容に合うものを 2 つ選ぶ問いである。会話を適切かつ丁寧に理解することができれば正答にたどり着ける。2 つの正答の選択肢はそれぞれ 1 つ目と 2 つ目の会話文の

内容が反映されたもので、バランスが取れている。

第4問 設問数（5），解答数（8），頁数（7），配点（30）であり，頁数は昨年度と比べると3頁増加した。連続性のある会話と，その内容をまとめたメモを解釈した上で，ドイツ語で表現するための知識・技能が試される出題形式である。今年度の会話場面では，ドイツの芸術大学で学んでいる学生が，金継ぎの仕事をしている女性の話を聞き，質問するという内容が展開された。昨年と同様に，設問には学生が取ったメモが組み込まれた。さらに今年度は，金継ぎに関する女性の話をもとに学生が作成する発表用のスライドを選択し，設問に答える形式が加えられており，この点は新たな試みとして興味深い。情報を取捨選択し，要約する能力を問う出題形式であると評価する。会話内容の難度は概ね適切であり，金継ぎというテーマも近年注目されているため，比較的馴染みやすい話題であるといえる。一方で，発表用のスライドを選択する設問では，ドイツ語による発表資料作成に関する知識と技能が問われており，全ての学習者にとって公平な問題であるかどうかについては，検討の余地がある。

問1 会話の表現とメモの内容に記載された語彙を理解できているかが問われている。会話の sichtbar がメモでは erkennbar, entfernen が verstecken, kostbar が wertvoll と言い換えられていることに気付く必要がある。

問2 会話の最後で金継ぎの仕事をしている女性の発言内にある Chance の意味を理解できていれば容易に正答を選択することができる。

問3 会話全体の流れを把握しているかどうかを問うている。選択肢として提示されたスライドの内容を読み取り，会話中に言及されていない情報を排除したうえで，会話の展開に沿ってスライドを並び替えることができれば解くことができる。一方で，発表をドイツ語で構成するための知識や技能が前提とされており，そういった機会が少ない学習者にとっては難度が高い問題だった可能性がある。

問4 会話に登場しない内容を含む選択肢を消去すれば，正答を導き出せる。会話の内容と選択肢を丁寧に読み解けるかを問う良問である。

問5 会話の内容を適切に理解し，会話に登場しない内容を含む選択肢を消去すれば，正答が③であることが比較的容易に導き出せる。

第5問 設問数（6），頁数（6），配点（35）。大きなグラフが2つ加わったことで，昨年度より2ページ増えている。

本文は，2019年の記事と2024年の資料からなる。いずれも「ドイツ人の余暇の過ごし方」と題してあるが，実際にはメディア利用の変遷が主たるテーマである。自由時間にテレビを見るか，ネットサーフィンをするか…といった話題は受験者にとって非常に身近であり，予備知識がなくても理解できることから，作問に対する出題者の配慮が読み取れる。

前者の記事は144語と非常に短く，1段落しかないシンプルで簡潔な構成である。一方後者の資料は，2つの統計資料（棒グラフ）のみで，テキストはない。これらの記事と資料を比較し，2019年から2024年までの5年間にドイツ人のメディア利用がどのように変化したかを考えさせている。このような出題形式は，昨年度からの新しい出題傾向を踏襲していると言える。

問1 2019年の記事のタイトルに続く副題を選ばせる問題である。選択肢はどれも短文であるため明確でわかりやすく，迷うことなく正答を選ぶことができる。簡潔に内容の理解度を問う，良問である。

問2 資料の棒グラフから読み取れる内容として適切なものを，6つの選択肢から2つ選ぶ。数や割合に関する表現の理解が問われており，選択肢を丁寧に読めば正答を選ぶことができ

るだろう。ただし、選択肢にある分数とグラフ中のパーセンテージを比較するためには多少の計算が必要であることから、純粋にドイツ語の能力を問うていると言えるのか、やや気がかりである。

問3 4つの選択肢から、Telefonieren, mit Freunden machen に共通する特徴を選ぶ。正答以外の選択肢で迷う余地は少なく、比較的容易である。

問4 2019年と2024年を比較し、内容として適切なものをドイツ語の選択肢から選ぶ。全体的な理解を問うという出題の意図は明らかなが、5年間でネットの利用が増えそれ以外の利用が減っているということは容易に推測できるため、記事や資料を読まずとも選択肢の内容だけで判断できるのではないだろうか。

問5 メディア利用の今後に対する専門家の発言内容として適切なものを、日本語の選択肢から選ぶ。問4同様、正答以外の選択肢は感覚的に当てはまらないと推測でき、記事や資料の理解が十分に問えているのかやや疑問が残る。

問6 余暇の過ごし方について述べた4名の短いコメントを読み、2つの資料の内容と合致するものを選ぶ。出題文にある「資料1と資料2の両方の傾向を示すもの」という指示がやや曖昧に思われるが、正答は①なので、上から順にコメントを読めば、これが資料1・2と矛盾しないということは分かるだろう。

第6問 設問数(6)、解答数(8)、頁数(4)、配点(44)と昨年度から頁数が減少しているが、テキストの語数は昨年と同等(ともに450語強)である。テキストの内容もドイツ語圏における人間関係や物事の捉え方を題材にした心理学的な読み物で、異文化理解にもつながる内容という点で昨年度と共通している。特に目立って難解な文構造や難語は含まれておらず、スムーズに読めるテキストであるといえる。以下各問についてコメントする。

問1 正答の③を選ぶためにはテキスト全体を読んでおく必要があり、最初にテキストの大意を把握させる狙いが感じられる。正答も選びやすく、難度も適切である。

問2 下線が引かれた so einen Konflikt の内容を問うことで、その直前の段落の内容理解を試しており、適切な問いである。

問3 第5段落の内容に合致する選択肢を選ぶ問題である。段落の内容理解に加え、本文の Gewinner, Verlierer が④の Sieg, Niederlage に対応していることに気づけるかが試されている分、やや難度が高い。

問4 第6段落の内容に合致する選択肢を選ぶ問題である。問いの狙いも明確で、難度も適切である。

問5 テキスト全体の理解度を問う意味で良問である。

問6 テキストの内容が一定程度理解できていれば、②以外の選択肢は容易に排除できると思われる。

3 総評・まとめ

令和8年度の共通テスト(本試験)『ドイツ語』は、昨年度の出題形式や配点を踏襲しつつ、現行の学習指導要領が掲げる方向性を反映し、内容理解、情報整理、判断力といった能力を測定しようとするものであった。平均点は昨年度より下がったが、得点分布および語彙の選定、試験としての妥当性は概ね確保されていると評価できる。

長文問題では、目的や場面に応じて情報を抽出し、整理する力を多角的に測定しようとする意図がうかがえる。旅行日程表などの補助的資料を読み取らせる形式も継続されており、文章のみに依存しない高度な情報処理能力を問う構成となっている。設問で与えられている選択肢も比較的簡潔

であり、受験者が正答を導きやすいと考えられる。さらに難語を抑え、形態素や既習言語との比較から類推を促す工夫が見られた点は、受験者への適切な配慮として好意的に受け止められる。

しかしながら、今年度は読解の分量が増加し、迅速な処理を求める設問が受験者の大きな負荷となったことは否定できない。総語彙数が抑えられている点は評価できるものの、複数の資料を照合しながら読解を進める形式は、限られた試験時間内では相対的に高い負荷となり、平均点の下落に影響したことが示唆される。

4 今後の共通テストへの要望

現行の学習指導要領や英語の問題形式を意識した出題方針は理解できるが、高等学校3年間で習得したドイツ語力を測るという主旨に立ち返ると、教育現場の実態に即した作問を強く要望したい。基礎的なドイツ語力を測る試験において、過度な速読・処理能力が求められることで受験者の学習意欲が削がれることのないよう、出題内容・形式のさらなる工夫と改善が望まれる。

英語に偏らない言語教育を展開する上で、共通テスト『ドイツ語』の果たす役割は極めて大きい。第2外国語を学んだ成果が大学入試で適切に評価され、大学教育へとつながる仕組みを維持・発展させていくためには、高等学校・大学・関係機関が連携し、継続的に議論を重ねる必要がある。受験者にとって良質であり、挑戦しがいのある本試験の存続を切に願うものである。

最後になったが、本試験の作成にあたって問題作成に携わった関係者ならびに大学入試センターの尽力に対し、深く敬意と感謝を表したい。